

明倫短期大学学会報告

月例研究会抄録

明倫短期大学学会月例研究会は、平成15年4月の第1回より開始され、平成20年度では4月24日の第31回から10月23日の第36回まで計6回開催された。36回の研究会における演題数は68に上る。また、本年度より、より充実した研究会とするために若干の開催時間と発表時間の変更を行った。

明倫短期大学開学時の平成9年より歯科衛生士学科研究会の形で開催されてから、明倫短期大学研究会の形を経て本研究会を継続開催し、本年は12年目であった。明倫短期大学ならではの産学診の合同研究会として、本年も昨年に引き続き産学連携交流会や附属歯科診療所からの発表も含まれ、小規模ではあるが研究分野は多岐にわたる本学会で研究情報の共有をすすめることは、明倫短期大学や関係機関における研究活動がさらに発展するきっかけとなればと願う。次年度も継続して当研究会を実施し、今まで以上に内容を充実させていきたいと思う。

(植木一範、歯科技工士学科)

第31回 (通算第114回) : 2008年4月24日 (木)

(座長: 相馬泰栄)

咀嚼・嚥下機能障害の評価基準 —介護保険施設の実態調査—

江川広子 (歯科衛生士学科)

介護保険施設や在宅で、介護を要する高齢者や心身に何らかの障害を持つ高齢者に食事を提供する際には、咀嚼・嚥下機能を評価し食事形態を調整する必要があるが、現状ではその評価基準が明確ではない。そこでこの基準を検討するため全国2000の介護保険施設を対象に、咀嚼・嚥下機能に障害のある入所者への食事提供の実態を調査した。回答結果は咀嚼機能障害では、「噛めない」、「義歯の不適合」、「歯の欠損で咀嚼が不自由」の回答と、嚥下機能障害は、「むせ」の回答が多かった。入所者の要介護度や人員基準の職種は施設により異なるが、回答比率に施設の違いは認められなかった。また全てではないが、専門家が配置されていない施設では食事担当者が口腔内をよく観察し、咀嚼・嚥下機能障害に対応している様子がうかがえた。本研究から、介護保険施設における咀嚼・嚥下機能障害の主要な評価基準は絞られているが、その他の項目では多数の回答があり、整理されていないことが判明した。すなわち、

それぞれの施設間で障害の評価基準の統一がされていないことが明らかであり、咀嚼・嚥下機能障害の評価の基準化が必要であることが示唆された。

Silicone-Model-Systemの臨床応用例について

伊藤圭一 (歯科技工士学科)

義歯治療における印象採得は、概形印象によるスタンディーモデルから個人トレーを製作し、コンパウンド類で適切に辺縁形成された個人トレーにより義歯床下粘膜を精密印象する術式が一般的な印象採得法である。しかし、旧義歯を利用すれば、口腔内で概形印象を採得することが不要となることから、現在、附属歯科診療所の無歯顎と多数歯欠損の症例において、技工用シリコン印象材を用い、旧義歯の複印象からスタンディーモデルを製作し、その模型上で個人トレーを製作する技工術式 (総称してSilicone-Model-Systemという) を応用している。

この方法の主な利点としては、①既製トレーによる概形印象が不要②携帯しやすい器具と材料を用いて即座に個人トレーが製作できるので、歯科訪問診療にも応用できる③旧義歯の人工歯排列や咬合平面を技工用シリコン印象材のコアから再現することができることなどが考えられる。

今回、本法の技工手順と臨床応用例を詳細に説明し、会場から様々なご意見をいただいた。

第32回 (通算第115回) : 2008年5月29日 (木)

(座長: 丸山 満)

指頭感覚訓練の歯石除去実習への導入

木戸真紗美 (歯科衛生士学科)

歯科衛生士業務のなかで、多くの割合を占めるスクレーピングやルートプレーニング時の歯石の探査は、術者の指先の感覚で操作し、歯周治療の予後にも大きく関係することから、指頭感覚の向上を目指すことを目的にサンドペーパーによる粗さの識別試験を行ってきた。その試験結果から得られた効果を踏まえ、識別試験を歯科衛生士学科1年生の歯石除去実習に取り入れた。

その結果、サンドペーパーの粗さの差が大きくなるに従い識別試験成績が向上した。識別試験成績は、学業成績下位の者と矢田部ギルフォード性格検査 (YG)

明倫短期大学学会報告

による、性格の平均・普通型において高い成績を示した。しかし、これまでの研究より、識別試験を繰り返すことによって、指頭感覚の向上が見られたことから、今後は指頭感覚訓練を反復実施し、探針の操作技術を向上させることが必要と思われる。また、反復訓練において集中力が続かないとの感想が多いことから、いかにして集中力を持続させるかが今後の課題である。

明倫短期大学研究チームが試作した 歯科訪問診療ユニット

野村章子（歯科技工士学科）

口腔機能の向上は「歯科治療」「歯科保健指導」「専門的口腔清掃」「摂食・嚥下リハビリテーション」からなる。その中で、在宅や介護保険施設で歯科治療と口腔ケアを必要とする要介護者に応えるために、明倫短期大学研究チームは新潟大学および株式会社モリタ東京製作所とともに連携し、歯科訪問診療用ユニットを試作した。その仕様は、歯科材料や器具を搭載できるオールインワンで移動式、違和感を与えないデザイン、歯の切削に必要な機器の装備、簡単な技工作業スペースの確保、収納用の棚が組み込まれている、電源コードの一本化、吸引や注水のメンテナンスが簡単などであった。本試作機の仕様に対する歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士計17名にアンケートを行ったところ、移動性、収納性、切削・吸引機能、技工作業性、設置や診療準備の面で概ね良好な評価を得た。現在、介護施設へ搬送し、要介護者の義歯、充填、根管治療などの歯科治療や口腔ケア等に活用されている。

第33回（通算第116回）：2008年6月26日（木）

（座長：中澤孝敏）

部分床義歯基礎実習の進め方

佐々木 聡（歯科技工士学科）

部分床基礎実習の教育効果を向上させるために平成15年から各実習のステップ模型、資料の作成と改善を行ってきた。平成17年度から課題ごとにスライドを用いて全体の流れ、注意点の説明する方法も取り入れた結果、全体の流れが理解しやすい、説明のメモがとりやすい、実習室のモニタより見やすいなどの意見が得られた。また、写真より動画がよい、デモンストレーションの方がわかりやすいとの意見があった。学生にどの

技工操作の動画・デモンストレーションが見たいかアンケート調査を行い、学生が希望した技工操作の動画をスライドに追加した。翌年の学生に動画付のスライドで実習説明を行い、この実習説明についてアンケート調査を行った結果、動画があることで十分わかりやすい、スライドで説明されるとすごく解りやすかった、作業の流れを見ることができたので実習で作業がスムーズにいったなどの意見が得られた。これから多様化する学生教育にはさまざまな教材が必要になることを報告した。

歯科技工学生の英語

廣瀬浩二（歯科衛生士学科）

歯科技工士学科の学生に歯科医療用語を英語で指導する際に、どの範囲の用語を選択したらよいのか、その客観的な指標に乏しいのが現状であろう。そこで、教材作成に少しでも科学的なアプローチを導入しようとした。それが、コーパス言語学のアプローチである。

現在、歯科技工に限定したコーパスは存在しない。そこで、新たに作成することにした。例えば、歯科衛生士に関しては、米国、英国、カナダなどに歯科衛生士協会のホームページがあり、そこにはかなりのデータが蓄積されており、コーパスの作成に役立つ。しかし、歯科技工に関しては、歯科衛生士に相当するようなホームページに到達できなかった。そのため、主にアメリカの歯科技工関連のホームページから70の英文テキストを収集し、データベース化した。コンコーダンスーを使用し、高頻度出現語の中から、歯科技工関連の用語を選択し配列した。単語総数は22087語、文総数は1128文であった。更に、例文を添え、教材化を検討している。

第34回（通算第117回）：2008年7月24日（木）

（座長：栗崎由貴子）

本学実習生の歯科予防処置実習 自己評価の分析

渡辺美幸（歯科衛生士学科）

本学附属歯科診療所において実施している歯科予防処置実習について自己評価を行っているが、今回、その結果から現状を把握するとともに問題点の抽出を行い、歯科予防処置実習の見直しを行ったので報告する。

対象は、平成19年10月1日から平成20年3月27日ま